



『きみはいい子』

913.6ナ

中脇 初枝 著

ポプラ社 (ポプラ文庫)

ある町を舞台にした5篇の連作短編集。登場する子どもたちは育児放棄や虐待を受けており、大人たちもまたそのような過去から逃れられずにいます。重いテーマを扱っていますが、どこか救いを感じられる作品集。



『逆ソクラテス』

913.6イ

伊坂幸太郎 著

集英社

小学校の高学年の子どもたちが主人公の短編集。学校でおきる出来事を、子どもたちなりに考え、解決しようとする様子を、男の子が語っていく。そこには先生や様々な大人たちの姿も、子どもの視点で鋭く描かれています。

子どもと本を読むために



『本・子ども・絵本』

019.5ナ

中川李枝子 著
山脇百合子 絵

文藝春秋 (文春文庫)

『本へのとびら』

019.5ミ

宮崎駿 著

岩波書店 (岩波新書)

『えほんのせかい こどものせかい』

松岡享子 著

日本エディター
スクール出版部

019.5マ

『子どもの本のもつ力』

019.5シ

清水真砂子 著

大月書店

子どもの本を知ることのできる本を集めました。『ぐりとぐら』『いやいやえん』等で有名な作家中川李枝子、数々の名作アニメを創ったスタジオジブリの宮崎駿、図書館という場で子どもの本に関わってきた児童文学者の松岡享子、そして、短大で児童文学を教えながら『ゲド戦記』など多くの作品を翻訳、評論の執筆も続けてきた清水真砂子が、自分の子どもの頃の読書や、子どもの本、子どもの読書について、そして大人として子どもの本読むことについて語っています。子どもがどんな思いで本を読むのか、また、子どもが何を考えているのかもよくわかります。



興味のある本から読んでみましょう

ブックリスト

子どもを理解し、
先生や保育士になるために 2022

「子ども学科 入学前教育の案内」掲載の図書です

滋賀文教短期大学図書館

*表中の数字とカタカナの組み合わせの記号は、本学図書館の請求記号です

先生になる前に



『日本語びいき』

810.4シ

清水由美 著
ヨシタケシンスケ 絵

中央公論新社 (中公文庫)

『ちゃんと話すための敬語の本』

815.8ハ

橋本 治 著 筑摩書房 (ちくまプリマー新書)

「日本語はややこしい」とか「敬語ってよく分からない」など思っていますか？この2冊の本は、私たちが日常使っている言葉から、楽しく、面白く、でもきちんと日本語について考えさせてくれます。読み終わった時、「日本語ってスゴイ！」と思っているかもしれません。敬語についても上手に使えるようになっているかもしれませんよ。



『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

ブレイディ みかこ 著 新潮社 376.333 フ 1

貧富、社会的階層、人種など多様なバックグラウンドを持つ多くの生徒が集まる英国の中学に進学した著者の息子が、そこで起こる問題に悩みながらも真摯に向き合う姿が描かれています。多様性の中で生きることを考えさせてくれます。



『レジリエンス入門 折れない心の作り方』

141.8ウ

内田 和俊 著 筑摩書房
(ちくまプリマー新書)

レジリエンスとはストレスを跳ね返す力のことです。著者はこのレジリエンスを「心の自然治癒力」と表現します。この力を高め、折れない心の作り方が示されています。



『52ヘルツのクジラたち』

913.6マ

町田 そのこ 著 中央公論新社

52ヘルツで鳴くクジラの声は他のクジラには聞こえない。同じように人には聞こえない悲痛な声をあげている人たちがいる。そんな二人が出会いそれぞれの生を取り戻す物語。そんな人々の声が聞こえるようになりたいと思わされます。

子どもを理解するために



『パパは脳研究者 子どもを育てる脳科学』

池谷 裕二 著 クレヨンハウス 491.371イ

この本の著者は脳科学者です。娘さんの0歳から4歳までの育児日記の形が取られていますが、脳の発達を通じて、脳の働きについても解説されています。人間の脳そのものに関心のある人の興味にも応えてくれます。



『子どもの宇宙』

371.45カ

『子どもと学校』

370.4カ

河合 隼雄 著 岩波書店（岩波新書）

著者は臨床心理学者で、長年、心理療法を通して子どもの心に接してきました。その著者が、『子どもの宇宙』では、臨床経験を通しての具体的な症例や児童文学を題材に、子どもの心の世界とその成長について、また、『子どもと学校』では、教育のこと、子どもと学校との関係について、その新しい関係を創造する道を語っています。忘れかけていた子どもの心を思い起こさせてくれます。



『友だち幻想 人と人の〈つながり〉を考える』

菅野 仁 著 筑摩書房 361.454カ
(ちくまプリマー新書)

大なり小なり誰もが経験する友だち関係に関する悩み。特に成長期にある子どもたちは、深刻な問題へと発展することもある。「人と人との距離感覚」という視点で、人と人の〈つながり〉をとらえ直す「見取り図」を示してくれます。

様々な子どもたち



『ケーキの切れない非行少年たち』

宮口 幸治 著 新潮社（新潮新書） 368.71ミ

児童精神科医である著者が少年院で出会った少年たち。その中には認知機能に障害を持つ子が沢山いることに気づきます。学校にも一定数はいるとされる認知機能に障害を持つ子どもたちのためにも、ぜひ知ってほしい内容の本です。



『みえるとかみえないとか』

Eヨシ

ヨシタケシンスケ 著 アリス館
伊藤亜紗 絵

子どもたちにも大人気のヨシタケシンスケの絵本。宇宙には地球の人類とは違った能力を持つ「人」がいるところから話がひろがり、主として目が見えない人の感じ方をたどることで、多様な人々への理解が促されます。



『十人十色な力エルの子』

378オ

特別なやり方が必要な子どもたちの理解のために』

落合みどり 著 東京書籍
ふじわらひろこ イラスト

他の子たちが特に学ばなくても身につけることを、学ばなければ分らない子たちがいます。この発達のハードルを抱える子どもたちは、どういう困難があるのか、また、どのように対応すればいいのかが、分かりやすく書かれています。



『学校に行きたくない君へ』

371.42セ

『続 学校に行きたくない君へ』

371.42セ

NPO法人全国不登校新聞社 編 ポプラ社

20周年を迎えた我が国唯一の不登校専門紙「不登校新聞」。そこに掲載されたインタビュー記事から選ばれた、樹木希林などの20編を収録。聞き手は自身も不登校・フリースクール育ちの本誌編集長。続編にも、不登校・ひきこもりの当事者・経験者の子ども若者編修部によるヨシタケシンスケなどへのインタビュー記事17編が収められています。

子ども・学校・先生について考えられる小説



『夏の庭 The Friends』

913.6ユ

湯本 香樹実 著 新潮社（新潮文庫）

「人が死ぬところを見たい」と、夏休みに一人暮らしの老人の観察を始めた小学6年生の3人の男の子。ところが次第に深まっていく老人との交流が3人の夏を忘れえぬものとしていきます。



『廃校先生』

913.6ハ

浜口 倫太郎 著 講談社（講談社文庫）

1年後に廃校になる全校児童7名と教師4名の小学校。その学校の赴任2年目の若い女性教師と6年生3名の児童それぞれの視点から描かれる7編が収められています。そして、そこには一人のユニークな先生が浮かび上がってきます。